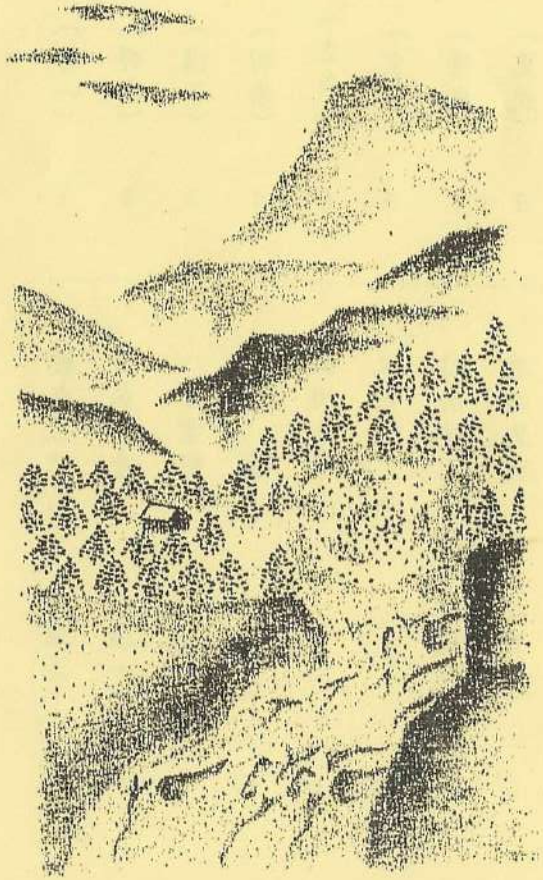
湧水



湧水 第十一号 令和二年八月 発行

千代田岳精会 自作自詠俳句研修会

湧水第十一号 目次

作者俳号	名	頁
伊藤しょう	（彰一）	1
鵜飼てるお	（輝夫）	2
神田つねこ	（恒子）	3
菊地龍駿	（利廣）	4
近藤まき	（まき子）	5
座間宗萌	（文子）	6
塩月凌司	（崇史）	7
鈴木陵人	（重成）	8
高橋　鴇	（登喜）	9
徳本じゅんじ	（順治）	10
橋本千舟	（隆一）	11
八田玄猷	（豊）	12
藤原　壽	（壽子）	13
細川をさむ	（修）	14
本田はじめ	（一）	15
前田道人	（道紀）	16
磯田烏城	（貞二）	17
岩崎泰俊	（泰俊）	18
随筆	高橋　鴇	

「二年目」

伊藤しょう（彰一）

去年今年をちこちよりの鐘の音
日のさして風向き変はり山笑ふ
夏ゴルフショット待つ間の木陰かな
納涼会待たず黄泉へと古稀の友
飲み会を終へて明るき夏至の空
雨止んで色戻りけり百日紅
初物ややせた秋刀魚に舌鼓
大和路やいらかの波に実る柿

「秋簾」

鵜飼てるお（輝夫）

長閑さや背びれを立てて鯉泳ぐ
弓を引く凛々しき乙女緑さす
夏祭り神田浅草またにかけ
朝顔を抱へて笑顔母子かな
夕暮や八百屋の軒の秋簾
ひよどりの枝移りして空澄めり
青空やむらさきしきぶ実のたわわ
ベランダに色づく柚子の小鉢かな

「秋思」　神田つねこ（恒子）

鐘の音や闇間に余韻去年今年
雑木山谷間谷間の芽吹きかな
大芝生寝そべる人の長閑なる
入日さす水面に映ゆる濃山吹
提灯のあかりにまけじ踊人
友寄り来水墨展の秋思かな
公園の木の実跨いで子等遊ぶ
古往還銀杏黄葉の明かりかな

「連れ添うて」　菊地龍駿（利廣）

年明くる夜半に鐘の冴えわたる
連れ添うて五十四年や木の芽晴
教室の吟声高き若葉風
おゝおいしい妻と向かひて西瓜かな
村あげて太鼓こだまの盆踊
校庭に幼き友ぞ盆踊
秋風や齢と心さぐりきて
初雪や庭に静かな世界あり

「一直線」　近藤まき（まき子）

下萌えや深き靴あと一直線
春一番あいさつ言葉二度聞きす
駅弁のふたに米つぶ山笑ふ
新緑や力集めて山膨る
夏つばめ掠め横切る交叉点
ひとり居や西瓜半分嵩減らず
我子追ひスマホと駆ける運動会
碁仇の石を打つ音冴へわたり

「隙間風」　座間宗萌（文子）

初旅や昼餉は浜の漁師めし
玉砂利のすきますきまや草萌ゆる
借景に高層ビル群花の庭
手も口も濡れて至福の苺狩
蓮の花色香尽くして崩れけり
頬杖をつけば秋思の吐息かな
老木の朽ちたる洞に冬日差す
藁葺きの旧家軋めく隙間風

「冴ゆる」　塩月凌司（崇史）

月冴ゆる宴会帰りか路地の人
主じ逝き庭の沈丁香りけり
尾根道に見降す眺望山笑ふ
新緑や古刹訪ねて山路行く
親子して夜明の素足九十九里
外は雨トレモロを聞き秋思かな
秋風や露天の風呂に我れ一人
穭田に吹かれて乱る群雀

「背筋伸ばすや」　鈴木陵人（重成）

列なして登校の児や去年今年
詩を吟ず友と集ふや去年今年
草萌や背筋を伸ばす老いふたり
ピアノ弾く児の指長し春めける
三陸の鉄道開通山笑ふ
円舞曲流るるウィーンの春夕べ
新緑の帯のつづくや川堤
新緑やすくすく背伸ぶ孫二人

「汀につづく」　高橋　鴇（登喜）

入日さす汀につづく素足あと
妻の座も親の座も了へ盆踊
二尋に足らざる小川やみづすまし
草ぐさは秋思の象かぜほのか
棚を出てやんちやに遊ぶ藤の蔓
大岩の動かぬかたさ秋の雲
起こるはずなき独り居の隙間風
木枯らしの置き土産なる道を掃く

「御代変り」　徳本じゆんじ（順治）

齢重ね御代がはり待つ去年今年
若水やふるさとの事思ふ我
紅白に庭を分かちて梅ひらく
開発のままの宅地や草萌ゆる
新緑の令和を祝ひ皇居かな
三味を持つ素足の女路地をゆく
御代かはり変らぬ里の墓掃除
又ひとり吟友逝きて秋思かな

「多羅葉」　橋本千舟（隆一）

マスクして診察を待つ人の黙
白梅や保母と園児の鬼ごつこ
神苑の多羅葉咲くや葉に文字
蛙鳴く棚田の水に武甲映ゆ
靴並べ浅瀬に子等の水遊び
真黄色の夕焼みちのく浄土かな
沼尻に動く影あり鴨ならむ
隙間風築五十年の住み心地

「少年兵」　知覧にて　八田玄猷（豊）

国のため冬空に消ゆ少年兵
リハビリの妻と目に止む白椿
用水に鮴が戻ると便り聞く
バスを待つ子の声高し入園日
牧水の歌を肴に夜長かな
鴉来て目白の夫婦飛び去りぬ
里山に音しんしんと除夜の鐘
世の汚れ全て覆ふか雪化粧

「宇宙より」　藤原　壽（壽子）

読み初めの薩摩の志士の留学記
終末時計残り二分や草萌ゆる
不器用にトングで盛るや春休み
囀りの輪唱となる紙の里
籐椅子のきしみ記憶の乳母車
宇宙より祈りの波動八月来
繰りかへす素読の時や蝉時雨
拾ひてのなき銀杏を飛び越える

「山笑ふ」　細川をさむ（修）

仏壇や朝日に光る実千両
古都の夜火の粉飛び舞ひお水取
山笑ふ山辺の道を親子ゆく
灯を点し独り暮しの冷奴
半跏して何を秋思の菩薩かな
萩咲くや土塀のつづく法隆寺
秋刀魚焼く夕餉の膳に皿二つ
夜明け前残れる月の白さかな

「初笑ひ」　本田はじめ（一）

一病はどこかへ失せて初笑ひ
初電話声は京都のあの人か
春眠や試験の日々を忘れ去り
きょうだいの性格ちがひ山笑ふ
仔からすの親呼ぶ声の夜明けかな
登高や東京の灯を富士に見る
秋惜しむ上野の森の陶器市
初時雨目黒にさんまの店見つけ

「古硝子」　前田道人（道紀）

初茜文字なき時計着けてみせ
浅き春袋詰めして直売所
夏蝶の黒に驚く旅の里
トロッコ列車清流に夏の雲
人棲まぬ夏の館や古硝子
裏木戸を括る紐あり小鳥来る
寒夜の僧気の急き下る深き闇
古武士かや無住寺に石地蔵

「水ぬるむ」　磯田烏城（貞二）

二度童妻の吟声水ぬるむ
育ぐくむの文字に浸りし百日紅
蝉しぐれ余命の言は云はざりき
新年の賀の添書きに吟友思ふ
坪庭に一輪の花寒椿
新年の誓ひ一言先ず健康

「選句（朝日・ＮＨＫより）」　岩崎泰俊

平成や春雷一つ置土産
平成を忘れる如く櫻散る
炎帝に老いの気力を試さるる
思考力蒸発したる残暑かな
台風や泥と悲しみ置きて去る
大風雨去りて一気に秋の蝉
踏めば鳴る落葉の庭となりにけり
災害の無きを祈りて年新た